

Home Address Terminal

一属性を越えて相対し、許容し、集う一

21518056 米田 葉子
指導教員 宮 晶子 准教授

ネットカフェ難民 ホームレス 住居喪失
相対化 住所 洗濯

■研究の背景と目的

現代社会において、住所の持つ役割は非常に大きい。仕事をする上でも、郵便物を受け取る上でも住所は必ず必要である。住所はその人以上に、その人自身の存在を証明する要素を持つ。住所があることでその人の「社会的信用」を獲得できる反面、住所を持たない人々にとっては、存在証明を失っている為、生活することさえ困難をもたらす。その一例として、「ネットカフェ難民」や「ホームレス」が挙げられる。これらの問題に共通するのが「住居喪失」である。現代都市の中で、「ホームレス」問題は多くの課題を残す。ここでいう「ホームレス」とは、「住居」を喪失している、すなわち「住所」のない人々を指す。彼らは住所がないことで、社会的信用を得られず、住む場所や働き先を獲得することができない状況下にある。加えて、雇用形態や金銭的原因から住居確保ができず、少ない収入を得てもネットカフェや外食費の支払いで手一杯となる「貧困のループ」に陥っている。これらの問題を解決するために「施設入居」が挙げられるが、一度入居すると出られない規則に抵抗がある路上生活者も多い。住居喪失者である「ホームレス」が「本当に帰る場所＝家」を得るための、一時的な住まいを提供することで、彼らが地域生活に戻れる場所を提案する。また、同時に「ホームレス」が地域社会へ復帰するためには、他者の存在がかかせない。まちで見かけた「ホームレス」を「存在しなかったこと」にしてしまいがちな私たちの偏見を少しずつ解消するための方法を構築する計画を提案する。

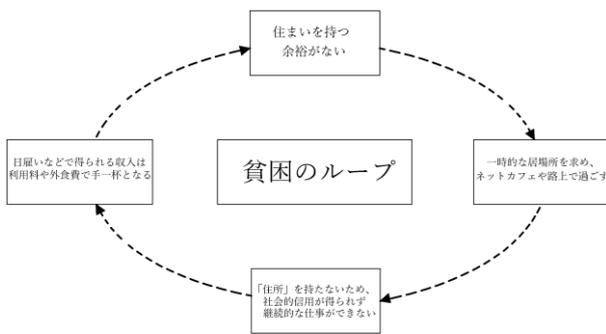


図1 貧困のループ

■住居喪失＝「ハウジングプア」の現状

一般に指す「ホームレス」と、「ホームレス」ではない人々を指す「他者」のあいだには深い溝がある。それは住所や雇用など、社会的立ち位置以外にも「ホームレス」という言葉が本来の意味とはかけ離れた言葉になってしまっていることも原因の一つである。住居を喪失した人々は別名「ハウジングプア」と呼称される。稲葉氏¹⁾はハウジングプアを、特定の人物の属性として捉えるのではなく、あくまで「状態」を示す語として使用すべきだと強調している。これは「ホームレス」の語が「路上生活者」「野宿者」という意味で使われるようになり、「権利として主張できる住居を持っていない状態」という本来の語の示す範囲が狭くなってしまったのと同様の事態に陥ることを避けるためである。一方で、厚生労働省は、ホームレスを文字通り「路上生活者」と定義し、「ネットカフェ難民」である住宅喪失不安定就労者を「ホームレス自立支援法」で定義されている路上生活者と異なった別の枠組みで捉えて問題解決しようとしている。しかしながら、別々に調査したところでこれらの区別は、その日の困窮度によって異なるものであり、両者は連続しているといえる。従って住居喪失の点ではネットカフェ難民とホームレスとの間に大きな境界線はないと言える。萩原氏²⁾は、上記に述べたハウジングプアの最終的な定義として、図2のように住まいの安定性を連続的で相対的な高低差として捉えることによって、現在生じている様々な居住の貧困の問題に、個別的ではなく、一体的にアプローチする鍵となる、と述べている。

■「ホームレス」と他者の関係—相対化の必要性—

i) 「ホームレス」への嫌悪感の原因

「ホームレス」と呼ばれる人々を見かけると、私たち

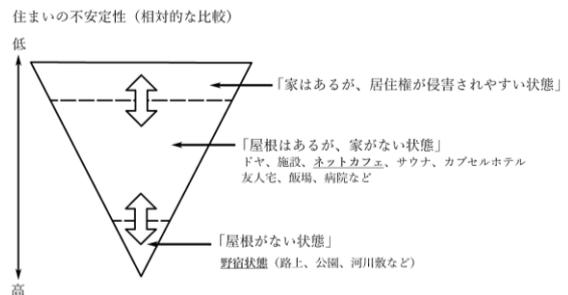


図2 ハウジングプアの全体像概念図

はふと相手との「違和感」を感じてしまう。その原因の一つに「恐怖心」が挙げられる。例えば、「他者」が移動する環境下に居る際、「ホームレス」は地べたにうつむいて座り込んでいる光景をよく目にする。周囲とは異なる動きをしている人を見かけると人は恐怖を覚える。

また、荷物の相対量が周囲とは異なることも大いに関係すると考える。大荷物を抱える人を目の前にすると、威圧感を感じることもある。「ホームレス」が所有する荷物は「他者」より少ないが、他者は家や仕事先に荷物を置く場所があるため、持ち歩く量は少ない（旅行や出張等一部を除く）。「ホームレス」はその荷物をほぼすべて持ち歩かなければならないため、相対的に荷物量は増加する。「ホームレス」という存在は「荷物が多い人」として私たちの脳内イメージで勝手に認識されている。本研究ではこの「荷物の相対化」に着目し、住居喪失者である「ホームレス」と「他者」の荷物量のバランスを相対化することで、荷物量による人間の誤配を利用し、外面上の境界をぼかす手法を取り入れる。



図3 荷物量相対化の概念

ii) 洗濯

「ホームレス」の手荷物の大多数を占める「衣服」は路上生活等において脱水・乾燥が難しいため、衣服を多く持ち歩くことが必然となっている。そこで洗濯から乾燥まで行えるランドリーを開放することで、「ホームレス」の荷物の相対量を、「他者」と合わせる。また、ゴミ回収を生業とするために、身体が異臭に包まれてしまう「ホームレス」の衣服を洗濯することで、衛生面の向上を図るとともに身を清めることで、彼らの自尊心を回復させる。

■敷地 —新宿区—

i) 概要

一日 350 万人の乗降客をもつ新宿駅のターミナル機能は地下鉄大江戸線、渋谷、新宿、池袋をつなぐ副都心線が新たに入り、さらに強化されている。また駅上部の人工地盤化など、南口の変化も大きい。例えば、近年では駅周辺の開発も進み、2016 年には高速バスターミナル、タクシー場を集約した交通ターミナルである「バスタ新宿」が誕生し、交通機関のアクセスが容易となった。巨大ターミナルである新宿駅は、同時に多種多様な人々が集う。

ii) リサーチ

対象敷地は JR 新宿駅甲州街道を出た先にある「イーストデッキ」（〒151-0051 東京都“渋谷区”千駄ヶ谷 5 丁目 24）とする。住所の混沌性は新宿区の中でもこの地区のみ発生しており「施設名—住所」間の矛盾を楽しむことができる。また、鉄道路線上に垂直存在するデッキからは、新宿駅ホームに流れる人々や電車、さらには甲州街道口先にある「ペンギン広場」で佇む人々を見渡せると同時に、互いに「見る—見られる」行為が発生している。新宿サザンテラスと新宿タカシマヤ・ニューマンの間に渡された本敷地は、人々の移動手段として活用されている。

■設計

i) プログラム

鉄道路線上に存在するデッキとしての流動性と、駅—敷地間の距離を利用し、「ホームレス」のみならず、観光バス利用客や終電を逃した人、帰る家のない人など、多種多様な「他者」を受け入れる一時集合場所を設計する。ランドリーモジュールを最小単位として空間配置を行い、1 層目を通路兼一時荷物預かり場、2 層目をランドリースペース、3 層目を一時住居兼待合所とする。

ii) 手法 —仮設足場の利用—

施設と路上空間の中間地点であり、閉鎖的空間を解消するため、本設計では仮設足場を利用する。仮設的空間であるため、住居喪失者が自分の居場所を可変的に変化させる。

iii) 手法 —ドラマ・ツルギーを用いた設計—

演劇になぞらえた社会観察の仕方である「ドラマ・ツルギー」の手法を用いる。このことで、日常的なレベルで自分たちが住む社会の可能性を感じることができる。誰もが自分の役を演じ、相手もその「役」として扱うことによることで、対人への均質化をはかられ、「脱中心化」が可能となる。この考えは同時に対人への思考の相対化ともいえる。この手法を用いるため、駅とデッキの距離での水平関係、通行する人—洗濯する人などの上下関係の「見る—見られる」関係を利用し「演劇性」のある空間配置を行う。

【注釈】

¹ 稲葉剛「ネットカフェ難民からハウジングブアへ」（ハウジングブア原論～「住まいの貧困」と向き合う 第1回）『賃金と社会保障』1480号、2008-12-9頁

² 萩原愛一『住宅のセーフティネットは機能しているか—住宅弱者に対する政策と課題—』
<http://www.ndl.go.jp/jp/diet/publication/refer/pdf/071002.pdf> 国立国会図書館調査及び立法考査局、レファレンス 2010-3-30 頁

【主要参考文献】

・東京都福祉保健局生活福祉部生活支援課『住居喪失不安定就労者等の実態に関する調査報告書』